

第4回府中市文化芸術推進計画検討協議会会議録

1 日 時 令和7年5月16日（金）午後3時～午後5時

2 場 所 府中駅北第2庁舎3階会議室

3 出席者（敬称略）

(1) 委員9名

小林真理委員（会長）、大平洋介委員（副会長）、小野一之委員、小林瑞恵委員、
新井有佐委員、玉村明日香委員、中村洋子委員、鹿島伸明委員、澤井すみ子委員
※ 橋本善八委員 欠席

(2) 職員9名

矢ヶ崎文化スポーツ部長、古田文化スポーツ部次長兼スポーツタウン推進課長
平澤文化生涯学習課長、斎藤文化生涯学習課長補佐、
佐々木文化生涯学習課文化振興係長 中司主任、鶴久森事務職員、
神山府中市美術館学芸係長、江口ふるさと文化財課長

4 報告事項

(1) 4月の人事異動に伴う事務局員の自己紹介

(2) 配布資料の確認

ア 会議次第

イ 資料1 第3回文化芸術推進計画検討協議会会議録（案）

ウ 資料2 第3回文化芸術推進計画検討協議会振り返りシート

エ 資料3 現行計画の施策評価シート

オ 資料4 次期府中市文化芸術推進計画骨子（案）

(3) 前回会議録の確認

第3回議事録案を了承（委員名非公開での公開に同意）

(4) 資料の説明（事務局より）

第3回協議会の意見を資料3に整理

現行計画施策の達成状況を資料3にて評価

資料4「骨子案」の修正点説明

5 審議事項

骨子（案）の検討

会長： 前回の議論から様々な修正点や加筆箇所がある。内容や表現についての疑問や修正点があればご意見いただきたい。

委員： 骨子案の最後にある「誰一人取り残さない文化を通じた協働」の文言について、ひっかかる。国連のSDGsでよく使われる表現ではあるが、この言い方では、自分が取り残されない側にいる印象を受ける。むしろ、「誰一人取り残されない社会」という表現の方が良いのではないか。

最近、新府中市史の民俗編ができたところ。府中市民である民俗学者の宮

本常一氏が府中の文化芸術について次のように述べている。「しかしなお、新しく住んだ人は、もとおった人たちとの間に不当の融合的な親縁関係というものはまだ生まれていない。これが本当に近代化するためにはこの2つのものが融合し合うような政策あるいは対策が講じなければならない。それがなければ、人々が思い思いにまちまちにただ同じ場所に住んでいるというだけで、個々の目的の違った形の1つの集合体にすぎなくて、それを新しく府中文化とはできないとわずかばかり調べた中で私が実感したのです。どのように集合化していくかはこれから先の問題になってくるのではないだろうか」と指摘している。新しい市民と昔から住んでいる市民との融合の中で府中文化が形成されていくことは40年前も今も課題としてあると感じた。

会長： 計画にどのように反映するべきかお考えはあるか。

委員： 文化施設とかの歴史的背景の文言がある中で、外国人も含めた新しい住民と共にということを強調した方が良いのではないか。

会長： 「すべての府中市民が」という箇所について、本当にすべての府中市民がそのことを共有しているか分からないという指摘。新しい人が入ってきて1つにまとまる必要はないが、そこに住んでいる人が一緒に文化を作っていく、主体として関わっていくと、いずれ新しい文化が生まれてくるはずだということだと思う。もしかしたら、そこに垣根があるかもしれないことも考えていかないといけないのではないか。

委員： 前回欠席しているため、他の委員の意見を聞いてから質問する。

委員： 前回、指摘した箇所は反映されている。必要な人たちに情報が届くことや、やってきた取組をどのようにアーカイブしていくかという視点が、全体通して見えづらい。アーカイブが他の分野につながっていったような見え方にできないか。どんな事業でもアーカイブ化は必要になるので、府中市としてどのように考えているのかを知りたい。共通項的なものがうまく表現されていると良い。

会長： 計画では、役所内でも役割分担がはっきり示し、記載されていれば実施されることになるが、その縦割りの捉え方の弊害もあるのではないかという視点からご意見をいただいている。情報収集やアーカイブは全体に関わることなので、基本理念みたいなものとして、様々な施策を考えていく上での前提として置かれている方が良いと認識して良いか。

委員： 縦型の考え方になりがちなものをどのように横につないでいくか、最終的な計画推進に向けて、どのように市民に分かりやすく伝えていくかが課題。基本理念の各項目に実際の業務として取り組む人たちにとっても、全体にまたがるような基本理念があれば皆が同じ向きを向いてやっていかないといけないことが分かるので重要な視点だと思う。

会長： 最終的にどのように表現するかは分からないが、広報や情報は、すべての領域において横軸でつながっていなければならない。また、アーカイブについても、歴史分野だけではなく、全体で考えた方が有効ではないかということか。

委員： 今、行っている取組もアーカイブになり得る。これをどのように残していくかを横軸の考え方で捉えていくのが良いと思う。

- 会長： 確かに検討すべき必要があると感じた。そもそも歴史はアーカイブすることを前提で動いているが、それ以外の分野でもアーカイブしていく発想を入れ込んでいくのが大事で、その通りだと思った。それをどう表現するかは改めて考えていきたい。
- 委員： 前回議論した内容をうまく肉付けしていただいたと思う。「協働」のキーワードが入っているのはうれしい。細かいことだが、骨子案にある広義の捉え方の部分、「文化を通じて協働する」の表現は、「協働すること」そのものが目的になっているようで違和感を持った。「協働することで文化が広がっていく」とか多様な主体が交わっていくことなので、文化の広がりがもう少し見えると良いと思った。
- 会長： 細かいニュアンスについてこだわることで市民に伝えられるので、こうした意見はありがたい。文化を通じて協働するというよりも、協働することによって文化の可能性が広がる、協働することがどのように文化につながるのかという視点が重要であるという指摘。是非。何か具体的な文言がないかアイデアをいただきたい。
- 委員： 資料4の3ページ、「基本施策」の項目の黄色い字のキーワードは非常に分かりやすいと感じた。また、基本理念の「疫病や自然災害、社会課題に立ち向かう文化」という文言について、コロナ禍が文化芸術活動に深刻な影響を与えた中でも、一時の停滞の時期を経つつ、それでも立ち止まらず動いて元に戻りつつある現状を感じ、文化芸術というものの強さを感じ取ることができた。
- 会長： 基本理念の「疫病や自然災害、社会課題に立ち向かう文化」という表現について違和感を持った。これだけが「～文化」と終わっている点で、他の表現と調和しておらず、やや浮いているように見える。この視点は委員の指摘で、コロナ禍で世田谷美術館の話为例にご意見いただいていたが、その時の意見を詳しく聞けなかったため、分からないところがあるが、「文化」の文言を削除してはダメなのか。そもそも、この内容を基本理念において良いのかも分からない。
- 委員： 確かにここだけ「文化」で終わっていることは気になる。また、「立ち向かう」という言葉が、負けないでよみがえって発展することをうまく言えたら良い。
- 会長： 文化にはそのような力があることを書いた方が良いのではないか。
- 委員： 「自助・共助・公助」ができる文化を育むという理解で良いか。立ち向かう文化を育てるのではなく、防災の視点である「自助・共助・公助」の3つを育むまちをつくる。共助はSDGsの「誰一人取り残さない」という思想にも通じる。社会課題に立ち向かう文化を解決するためには、「自助・共助・公助」の視点が重要ではないか。
- 会長： ここの言葉の置き方をどうすればじっくりくるのか。文化には力があることを表現するためにここに記載してあると認識しているが、もう少し分かりやすい表現にできないか。
- 事務局： 「多様性を認め合い、人と文化が磨かれるまち」は基本理念として仮置きしている状況で、この基本理念に盛り込まれる視点として、委員の皆様から

いただいた意見を基にキーワードとして仮に配置している。人は多様な側面を持っていること、文化・芸術が人の生活に潤いを与えたり、活力になっていくもの（文化芸術は優先度が低いものとして取り扱われていたがコロナ禍を契機に明らかとなった。）、文化そのものが様々な課題の解決につながるような創造性を持っていること、文化が多様な主体をつなぎ合わせる可能性を持っていること、文化によって幸福度が高まることなど、委員の発言を踏まえたものとなっている。最終的にこのキーワードを残すかは計画の作り方次第と認識している。

会長： 今の事務局説明を前文的にそのまま書けば良いのではないか。法律の前文のように、この基本理念を理解してもらうための説明文があった方が良いのではないか。この「多様性を認め合い 人と文化が磨かれるまち」だと唐突感があるので、今の事務局説明が分かりやすかったのもそのまま入れてはどうかと思っている。

委員： 会社での経験しかないが、事業計画や方針展開の経験から申せば、理念としてはこれで十分である。ただし、市民にとって分かりやすく伝えるためには工夫が必要だ。たとえば資料4の理念の左上、「人は多様な側面を持っている」という文言は、そのままでは「当たり前だ」と受け止められる可能性がある。「府中市の人は多様な側面を持っているので、こうあるべきである」とか、「多様な側面を持つ者としてこういう方向性を追求する」といったようにすべきではないか。「社会課題に立ち向かう文化を追求し続ける」「文化が創造性を広げることが重要」など、行動や意思を感じさせる表現が必要ではないか。

私は府中に65年住んでおり、今年70歳になる。地域の文化の変遷を間近に見てきた立場からも申しあげたい。

ここ5～6年、まちづくりの名の下にまちなか（府中駅前）の再開発が進んでいるが、四谷や多磨村などの他の地域の文化の気運がしぼんでしまっているように見える。地域が元気であってこそ、府中の文化全体が保たれるのではないか。

そのような現状認識を踏まえると、国や東京都の動向だけでなく、府中市の動向を明記すべきである。地域文化の活性化、監視機関の有効活用などビジョン実現のための行動指針などを記載した方が良いのではないか。

そして、成功するためには諦めず続けていくことだと思うので、PDCAサイクルを回すために監視機関の役割は重要である。今はPDCAが回っていないように感じる。計画でも監視する組織名を入れるべきではないか。

会長： 府中市の動向について事務局で考えたものが、「今回の策定の背景」の部分である。その部分に関していえば、「地域文化の力が落ちている」という書き方はしたくないが、地域の現状がどうなっているかを記載する必要はあると思う。どのように書くかは検討が必要だが、先程の新住民や旧住民の隔たりや、地域の文化度が今どうなっているか、今後どうしていくかの視点が重要というご意見。また、実施体制におけるPDCAも重要であり、自己評価をしたのが評価シートだが、PDCAが有効に機能しているか否かが明確でないというのはご指摘のとおりである。公金が投入されている以上、積極的に

P D C Aを回していく仕組みが必要である。それを動向のところか、計画の推進体制に書くのかは今後検討が必要。財団や博物館に提示してやってもらうのかなど、評価の仕組みは今後考えていく必要はある。

委員： 文化とは一貫性のものではないと認識している。どれ程立派な構想や計画を作成し数値目標や責任体制を明記しても監視機関がなければ絵に描いた餅になるのではないかと感じ、P D C Aの重要性について発言している。パブリックコメントはやるべきではないか。

会長： パブリックコメントは毎回、策定時に行っているはずである。

委員： 前回の計画では、パブリックコメントを受けて修正した内容がどこか分りにくい。計画の第5章「進行管理」では、「隔年で、各基本施策における事業の実施状況を調査し、進捗管理を行っていきます。」と記載されているが、その結果が報告されていないのではないか。

事務局： 何をアクションとして捉えるかによるところであるが、主要事業の評価は、2年に1回実施し、庁内で確認している。今回の評価シートは、現時点での基本施策ごとの評価となっている。この計画におけるP D C Aは2年に1回、主要な事業について指標を設定し、評価をしているが、コロナ禍で事業が実施できなかったことや事業を実施したが参加率が低かった事業については、その要因を踏まえて実施方法の見直しを行っている、それぞれの所管課の中で創意工夫をしながら取り組んできているところ。

会長： おそらく実施されていることが見えにくいという指摘なので、見せ方を今後、考えていく必要がある。

委員： 文化芸術推進計画と総合計画の計画期間は異なっていることから、上位計画やコロナ禍などで考え方が変わることがある。そのタイミングでP D C Aを回していくことが重要ではないか。

会長： 文化の領域において、1年ごとに事務事業評価をする必要がないのではないかと個人的には思っている。文化領域では、何が積み上がれば発展するのか振興するのかが見えにくく、また、成果が現れるまでに時間がかかる。事務事業評価をまじめに毎年実施し、それに基づいて何らかの説明責任を果たす、あるいは、外部からの意見をj得るといった行為自体が目的になってしまい、かえって本来の目的から外れてしまう可能性もあると思っている。総合計画の計画期間が違うので、作った計画を見直すことや、中間評価も含めてどこまで進んでいるのかを確認する視点は必要である。

現在は庁内で自己評価的に行っているが、それを外部や市民と共有し、意見交換できる場を設ける方が良いという意見として受け止めた。また、そのための仕組みが今あるのかがポイントであると認識している。これは、先程の他の委員からの指摘にもあるように、理念や施策、目指す姿ができた段階で、「どうやってこれを実現していくのか」という話と深く関係してくる。近年では計画が比較的丁寧に作られるようになってきたが、かつては「作って終わり」という傾向もあった。今回のように評価を丁寧に実施するようになってきている。こうした内容を、今回の計画に組み込んでいく必要があるので、今後考えていきたい。

委員： 3ページの基本理念にある「文化があることで幸福度が高まる」という表

現には違和感がある。日本の幸福度は国際的に低く、年齢とともに幸福度が感じなくなってくることや経済的状況など様々な要因が影響する。例えば、「文化があることで心の豊かさを育む」、「文化があることで豊かな人間性を養う」、「文化があることで幸福感が高まる」などとしてはどうか。「幸福度」という表現に違和感を持った。幸福度という指標を設定し、後々評価する上でも難しいのではないかと思った。

「市民に身近な文化センターの魅力向上」という表現について、本当に「身近」と思われているかは疑問である。「時代に応じた既存施設の機能強化」などといった、時代に応じて既存施設の機能を高めて活用していく表現にすることですべてが含まれるのではないか。情報発信についても、紙媒体・ウェブ媒体のほかにSNSも入ってくるのではないか。特に、紙媒体はかつ書きでも(広報紙)など、具体的な内容も入れておいた方が良いのではないか。基本施策3にある「文化資源のアーカイブ化」について、横串としては、歴史を正しく伝承して、未来につなげていくことが大事なことで考えると「クロニクル」の方が良いのではないか。既に歴史資料館でつくられていることは理解しているが、ここで分かりやすく表現することも大切だと思った。府中に住んでいる人は愛着を持って住んでいるので、そこで自覚や意識向上を高められると思う。次世代に伝える上でも過去の人が何をしたかを学ばないと未来を創造するヒントにはつながらないと思う。府中で行われている様々な会での活動や団体の活動について記録することで、活動の評価や改善も改めて見つけられるのではないか。また、観光の側面からも記録があることで、地域振興としても貢献できるのではないか。「クロニクル」として、府中の記憶を残して未来に伝承することで、住民の意識が向上し、まちが活性化し、質も高められると思った。

会長： アーカイブというよりはクロニクルの表現が良いということか。

委員： 自分の中ではクロニクルが横で、アーカイブが縦に落ちている認識。

副会長： 府中の森芸術劇場は4月末に改修工事を終え、5月1日に無事リニューアルオープンを迎えた。こけら落とし公演や主催事業も満席となり、多くの市民が再開を待ち望んでいたことを実感している。

今回の骨子案で特に関心を持ったのが、「府中市らしいネーミングや愛称の検討」という点で少し考えてみた。芸術・文化は五感の中の「視覚」「聴覚」「触覚(触れる・体験する)」に通じることを考えると、「見てみる」、「聞いてみる」、「やってみる」が3つ「みる」がキーワードではないかと思った。これら3つの感覚は、劇場での演劇鑑賞、音楽鑑賞、ダンスやワークショップなど、多様な文化体験に共通しているのでキーワードとして検討してはどうか。

会長： 計画のネーミングについてご意見いただいた。今回の計画は「文化芸術推進計画」であるが、文化財や芸術文化、まちづくり、地域文化といった多様な領域が対象となっている中で、「食文化」という視点が抜けているが良いのだろうか。府中に特別な食文化があるかは知らないが、府中の文化の捉え方に関わってくるので気になった。地域によって食文化が違うことが注目されているので、食文化について取り扱わなくて良いかは確認が必要。

また、基本施策1のめざす姿の「主体的に活動しています」の表現が気になった。様々な文化や芸術に触れて、差別的な意識をなくすことができるなど、踏み込んで記載すべきか分からないが、最後の言葉はこれで良いだろうか。「多様性を認め合い、人と文化が磨かれるまちを目指す」のであれば、実際には多様性を認め合っていないところもあるので、少なくとも府中市からは差別的なことがなくなっていくことが述語的に入っていても良いのではないか。府中市にどれだけ外国の方がいるかは分からないが、下の説明では積極的な表現で書かれていても良いのではないか。かといって、「差別をなくす」みたいな表現は、あまりにも文化に離れているように見えるので考える必要がある。タイトルや、基本施策のキーワードなど受け継ぐ・つくるのほかに「知る」がなくて良いのか。

委員： 他の委員が触れていた「府中市の動向」を追加する件については、計画の位置付けに記載する形でも反映できるのではないか。そこには、「その他の分野別計画との整合を図りながら」という記載されているが、具体的には、観光と景観と文化財の計画などがなる。観光振興プランや景観計画は策定済みで、ケヤキ並木の保護活用計画は今年度策定予定である。本計画は、これらの関連計画とつながる部分も多いので、これらの計画について記載することで府中市の動向になるのではないか。

ネーミングについて、副会長が発言された「見る」「聞く」「やる」という表現は面白いと感じた。宮本常一は「歩く」、「見る」、「聞く」と表現している。一方で、ユニバーサルデザイン的な考え方をすると、「見る」は視覚偏重、「聞く」は聴覚偏重になってしまうので、言い換えをするならば「つながる」ということではないか。文化それぞれ多様性の中で「つながる」、「はぐくむ」ことになるので、この2つの言葉（「つながる」「はぐくむ」）がキーワードになるのではないか。新たな府中市史では食文化について細かく描かれているので参考にできるのではないか。

3ページの「パブリックアートの活用」という項目について、成城大学の学生が府中のパブリックアートに関する論文（「パブリックアートの管理・保存・啓発活動」）をまとめていて、美術館副館長へのインタビューも掲載されているので参考にしてハードからソフトの取組を記載できるのではないか。

会長： 宮本常一氏やその他の資料については、是非、事務局を通じて皆に共有していただきたい。

委員： 3ページの基本理念について、「多様性を認め合い、人と文化が磨かれるまち」という文言に違和感を持った。「磨かれる」という表現については、『磨く』という行為を前提にしており、人は本来のままでは不十分で、何かしら手を加えることで価値が高まるという含意があるように感じられた。そのため、そもそも人は“磨かれるべき存在”なのかという疑問を持った。多様性を大切にするという理念のもとでは、それぞれのありのままの存在を尊重する視点がより適切ではないかと考える。また、上から目線で特定の価値観を押し付けているような印象を受ける。「認め合い」という言葉も、認めるかどうかという前提が含まれ、かえって多様性の制限につながる印象を与える可能性があるため、例えば、「多様性を尊重し合い、人と文化が響き合う街」と

かにした方が柔らかい表現になるのではないか。

また、「多様性のある共生社会」という表現については、「多様性のある」と「共生社会」という2つの意味が重複してしまう。そのため、「多様性を尊重する共生社会」とするべきではないか。また、「めざす姿」については、「気軽に」ではなく「身近に」の方がより文脈に合う表現であると感じた。

また、他の委員が触れていた「幸福度」についても、言葉としては良いが、どのような指標で測るのかは曖昧で、具体的に何をめざすかという視点では、ぼんやりしている印象を受けた。

会長： 「幸福度」は気になっているが、文化が幸福につながるという意味で、ここで記載されているのは良いと思っている。アンケートなどでも文化活動をしている人の幸福度は高いなどの結果が出ている。そのような文化と幸福度の結びつきを知ってもらうことも重要だと思う。確かに「幸福度」という言葉は気になるのももう少し表現を考えていく必要がある。

委員： これから文化に携わる人が増やしていくことが文化芸術推進計画を策定する目的ではないか。また、文化を知っている人に対して、社会や人生における様々な問題を文化の側面から解決できることを知ってもらい、参画してもらうことが重要ではないか。そのことをより府中市民に伝えていくためにも、主体となる市民や企業の方をイメージして作文すると多様性のところの文章もより良くなるのではないか。

また、計画推進のところで落とし込んでいくこともできるかと思うが、基本施策の中でも、今あるものを受け継いでいくという視点も記載できると良いのではないか。

また、アーカイブはどの分野でも保存していくことを念頭に置いて考えていくことが重要ではないか。SNSのインスタグラムなどで発信された内容も1つの気軽なアーカイブの形ではないか。そうしたアーカイブは時系列で整理した方が良い場合もあるが、それを評価し受け止めていくものによっても活用の方法は異なると思う。文化は数値上、分かりやすく結果が見えてくるのは難しいと認識している。だからこそ、今は何の価値があるか分からないことでも蓄積していくことで、次の計画策定時など後で振り返り・評価することができるのではないか。「アーカイブ」か「クロニクル」の言葉の選び方については引き続き議論できれば良い。

会長： アーカイブの重要性がここまで言われるようになった背景として、文化活動が記録として残ってこなかったという事情があるのではないか。博物館のような施設はそもそもアーカイブ機能を持っており、既にやっているのでアーカイブの重要性を問う必要はない領域だが、日常的なイベントや活動などは記憶として残らないことがある。そうしたものは、文化の発展や意識改革につながっているのに、振り返ったりクロニクル化したりするときに根拠となる情報がないのが文化領域の特色ではないか。一方で、まちづくりやアートプロジェクトをやっている人たちは積極的に取組を事細かに書き残すことをしている。そのようなことをやっておかなければ、後で気が付いたときに何も根拠となるものがなくなってしまうので、この分野もアーカイブすべきという潮流があるのではないか。

私に関わったある自治体では、複数の文化財団が合併される際に、財団のそれまでの活動記録が何もなかったので30年間の記録を改めて残してもらった。毎年の公演自体の記録はあるが、それぞれの財団が評価しないでした。合併後に事業を実施する上でもそうした記録が重要な素材となるのではないかと。もちろん記録を残している領域もあるが、ない領域も多い。また、市史や自治体史は文化分野が書かれていないことも多い。例えば自治体史は、行政、議会、市長の話が多く、文化については自治体主導のイベントがほとんどで、市民の文化活動が描かれていない。福岡市や高知県では、文化を市史に書き起こしていくために参加型で市史を作っている。アーカイブ的なものがないと市史にも書けない。消えていくものを何らかの形で残していく必要はあると思う。

委員： 府中市の文化・芸術が独り歩きするのではなく、文化・芸術を通じて、つながりや交流が生まれること、多様性が伝わること、子どもたちを含めたこれから文化芸術に携わっていく可能性がある人たちについて書かれていることが大事だと思った。発言があった「つながる」というキーワードは重要だと思った。愛称については、府中市市民協働の推進に関する条例が令和7年に施行されて、通称の「協働しよう。そうしよう。条例」は公募制で市民の意見を反映され作文されている。この名称としたことで自分事に思ってくれる人もいたので、この計画で愛称もどうなるかは気になった。また、広義の考え方の「文化を通じて誰一人取り残さない。文化を通じて協働する」について、個人個人で色々な形で文化を育てていくことになるので「協働することで文化が醸成する」とした方が良いのではないかと。

会長： 「醸成」というキーワードは熟していく感じがして良いと感じた。協働することによって文化が〇〇になるという書きの方が良い。委員の指摘にあったような「醸成する」、「はぐくまれる」などいくつか考えていく必要があると思う。

委員： 3ページの基本理念の赤字で示された5つの文言について注目している。中でも、2つ目の「疫病や自然災害、社会課題に立ち向かう文化」という表現に関しては、ここだけ「～文化」になっているため、削除するなどして他の書き方にそろえた方が良い。

また、自助・共助的な意味で、文化が武器になって社会課題に立ち向かっていくという理解もできるが、文化自体が決して疫病や自然災害などによって損なわれるものではない力があるという点を強調したい。また、他のキーワードの「多様な」という語が複数回使われていることが気になった。1つ目と4つ目の文言は、人が多様な側面を持ち、主体的に関わるという視点で重なっており、統合できる可能性があるように思う。

さらに、「幸福度」という表現も、指標としての「度」よりも、「幸福感」や「文化があることで幸せを感じる」といった、より柔らかい言い回しの方がふさわしいのではないかと感じた。

会長： このキーワードがあることによって基本理念が書かれることになるので重要なご意見。先程、代替案のご意見もあるので、基本理念につながるようにこのキーワードが使われると良い。私は文化があったからコロナ禍を耐

えられたところはある。文化の価値を知っている人たちはそのことを分かっているが、意外とそういった文化の力を知らない人の方が多いのではないか。文化なんて知らない、何の役にも立たない、自分の生活を豊かにするものではないなど、文化があることで困難な状況を耐えられることを知らない人もいるのではないか。その人たちに、「文化は役に立たないから知らない」、「公的な支援をするな」などといって文化を否定してほしくなく、その人たちに文化の価値を知ってほしいと思っている。文化の価値を知っていることが私の幸福につながっていると日々、感じている。「幸福度」ではない伝え方が必要。文化も、芸術文化に限らず、食文化なども含まれている。コロナ禍の時には本屋がいち早くオープンしたことで生きてこられたと実感している。そのようなたわいもないことをみんなで大事にしていけないか。そういうものは脆弱なので、知らない人に文化の本当の価値を伝えていくことを行政がやるべきことだと思っている。

委員： おそらく、みなさん文化の価値が分からないのではなく、時々ほっとしたりしては感じていると思う。それを文化だということを分かってほしいと思う。

委員： 基本理念について議論が続いてきたが、「幸福度」という言葉については、「豊かさ」という表現にしても良いのではないか。また、関連して府中市では令和4年に府中市DX推進基本方針が策定されており、その中に示されているコンセプトを本計画にも活かせるのではないかと考えている。ここでは、“FUCHU”の頭文字に対応したコンセプトとして、「Future：未来を見据えて考える」、「User：ユーザ（市民）目線で考える」、「Change：変化・変革を恐れずに考える」、「Human：人（市民・職員）を大切に考える」、「Unique：府中市オリジナルで考える」としている。これを文化芸術推進計画の中にも要素として取り入れることはできないか確認したい。

会長： DXの基本方針は既にも実施されているので、この計画を推進していく上でもDX計画で書かれていることは実施されていくと認識している。

委員： 生涯学習推進計画もまだ続いており、ステークホルダーに関係してくるのではないか。「文化」という言葉は、「福祉文化」など、名詞の前後に「文化」と付けたら何でも通じてしまう。生涯学習センターがなくなり各地区の文化センターが統合すると聞いているがどうなのか。

事務局： そのような内容ではないと認識している。

会長： 計画の位置付けなど、他の計画との関係のところについてのご意見をいただいている。確かに整合性が取れているかは気になるので、確認し記載してほしいということだと思ふ。

委員： コロナなど、計画推進期間の途中には色々な変化がある。「福祉の文化」の視点も重要ではないか。府中市において、「文化」という名称が付いている施設は地域の文化センターしかないと認識している。コロナの時に文化センターに人が殺到していた。文化センターは元々、福祉会館的に高齢者の拠り所となっており無視できない。今後、立派な生涯学習センターがなくなると想定すると、あらかじめ府中市の動向として、地域活性化について触れ、

「福祉文化」という新しい言葉を入れても良いのではないかと。また、先程も述べたがP D C Aはツールだと思っており、監視機関を置くことが重要だと思う。

会長： どの地域でも生涯学習センターをまとめていくことはあると思う。その辺りは、生涯学習推進計画等でやっていると思うが、そのことが、この計画とどのように関わっていくのか、というところだと思う。私自身、府中市の文化センターの位置付けを分かっていないので勉強したいと思う。

委員： 初回のアンケートで、裾野を広げていくきっかけがないという結果が出ていた。文化芸術の素晴らしさに、1人でも多くの人が気付くきっかけとして、文化芸術を体験できる場所に行き触れてほしいと思っている。これまで、「きっかけづくり」について繰り返し議論されていたので、このことはキーポイントになってくるのではないかと。

また、基本理念3ページ目にある「つながる」の項目で、「自分らしく関わることができる」という表現に少し違和感を覚えた。「自分らしく」という言葉がどういう状態を指すのか、自身の経験からも即座にじっくりこなかったため、気になった。

ネーミングに関しては、府中の文化芸術活動を「金太郎飴」のように捉えている。その棒状の飴を切ると断面には必ず金太郎が見えることをイメージしている。「けやき音楽祭 J A Z Z i n F U C H U」は4万人の来場者数だったが、これも府中市の取組の1つではないか。そうした大規模なものから小さな地域活動までを、例えば、アートカルチャーなので「アートカル」として共通のキャッチフレーズやマークを使って、どんな活動でも府中市の取組の1つであることを繰り返し伝えながら認知させていくと良いのではないかと。

また、けやき並木が忘れられていってさみしいという話があったが、2024年に実施された「F u c h u N e x t 1 0 0 Y e a r s (けやき並木100周年)」では、市内在住・在学の中学生を対象にマークとキャッチコピーを公募したところ760の応募があった。その後、選考委員会でインターネット投票を行い、その時の参加者が4,030人だった。このように、ネーミングは、市民に参加してもらい納得してもらうように投票で決めていくのも1つのやり方ではないかと。

会長： どのタイミングでネーミングを決めるかによって、やり方を考えていく必要があると思う。自治体は、良いキャラクターやロゴをずっと使い続けて、価値を普及していくことも大切だと思う。頻繁に変えてしてしまうことで効果がでないこともあるので、重要な意見だった。

副会長： まず、2ページ右上の「多様な主体による新たな文化事業」については自分も気になった。先程、言及のあった「J A Z Z i n F U C H U」は、他の主体によるものであるが非常に良い活動なので計画に記載していただきたい。また、けやき並木通りでのイベント「キテキテ府中」も、ステージプログラムや民間企業による飲食店などの出店などを通じて、交流と賑わいを生み出しており、文化的な役割を果たしている。また、性質は少し異なるが、競馬場で実施される花火大会では音楽とのコラボレーションも行われており、非常に興味深い企画である。こうした活動も計画に記載できないか。

次に3ページの基本理念に関しては、「疫病や自然災害、社会課題に立ち向かう文化」という文言の位置付けに違和感がある。この表現は、より下位のところに入れていっても良いのではないかと感じている。

また、「幸福度」の表現については、「心の潤いを育む文化」とかにしてはどうだろうか。

会長： 私は住んでいないので分からないこともあるので、皆さんから府中市の文化的特徴については良く確認をしてほしい。府中市の美術館は制作活動をサポートしておりすごいと思っている。他の地域から見ると、どこよりも早く創造型の支援をしている府中市のすごさが分かるが、地元の人たちにも、もっと知ってもらうことは大事だと思った。出前講座で講演者を探したり、芸術家の卵をうまく探して舞台に出てもっている活動をしているので、そのような活動を計画の中で載せていただきたい。上手にニュアンスを伝えることは大切で、役所言葉なのでこれで良いと妥協しては良くないと思っている。言葉を精査して、真剣に考える必要があると思った。委員の皆さまの専門性から感じることもあると思うので、もう一度、骨子案を見て、気になることがあれば遠慮なく事務局にお伝えいただきたい。それから、個人的にはネーミングは「つながる」、「はぐくむ」が良いとは思いますが、「キーワード」が3つ並んでいた方がかっこう良く、収まりが良いと思うので、もう1つ何かあれば良いと思う。

また、他の委員がおっしゃったどのように推進していくかも大事な視点だと思うので、今後も積極的にご意見いただきたい。それから、「監視機関」という表現を用いたが、文化の領域にはなじまないのではないかと。「監視機関」というと上から目線で、何か悪いことをしているのを罰するようなイメージも持ってしまうので、評価機関や推進機関など別の言い方を考えていく必要があると思った。

委員： 「幸福度」という言葉について考えた際に、WHOなどが用いている「ウェルビーイング」という概念が参考になるのではないかと考えた。「ウェルビーイング」はまだ一般的には十分浸透していないかもしれないが、「幸福度」という言葉も同様に人によって捉え方が異なり、必ずしも明確とはいえない。むしろ、「ウェルビーイング」の方が身体的・精神的・社会的に良好な状態を含む包括的な概念であり、文化を通じてそうした状態を高めていくという方向性がより適切ではないかと感じた。

会長： そうすると、ウェルビーイングの説明をしないといけなくなるかもしれない。先程も福祉の話が出ていたが、ウェルビーイングは福祉的な考え方を含んでいるように思える。「福祉」という言葉だと上から提供されるイメージになるが、もっと私たちから幸せになっていくニュアンスを出すとすると、確かに今は「ウェルビーイング」という言葉になるかなと思う。それも含めて、もう少し議論していく必要があるかもしれない。いずれにしても、骨子案については色々と修正するところはあるが、全体的な方向性はこれで決定して、この案を基に調整をしながら素案を作成するという方向性で良いか。

委員一同： 異論なし

会長： それでは「次第4 その他」について、事務局より説明をお願いします。

事務局： 次回の府中市文化芸術推進計画検討協議会の日程は、来月6月25日水曜日の午後3時から、会場は府中市北庁舎3階会議室を予定している。日程が近づいたら改めて開催通知を通知するので、ご出席をお願いします。

6 閉会